

現代中国学 中島 嶺雄



花の季節に更埴市の杏(あんず)の里を歩いた。花の中で迷いそうになつた。信州は学者の里だ。どこを見ても優れた学者がいる。大学教授だけではない。町の学者、村の研究者が多いのにも驚く。層が厚く広い。学者の里でも迷いそうである。

憲法の東大教授小林直樹(○)。やせぎすでまじめな容姿。平和憲法擁護の論陣を張る。「平和憲法は世界で最も進んだもので、日本にも人類全体にも

意味がある。「軍隊で国は守れない」。その論法は常にストレートで、変化球で勝負することがない。「融通がきかず、原理原則でものをいって妥協しないのが信州人。ほくもそうです。その時々状況に流される日本人の現実主義の中で、原則でものをいうことも必要ではありませんか」

小諸市の生まれ。子どものころ立川文庫に夢中だった。相撲の雷電為右衛門は隣の東部町生まれ、真田十勇士の

負けん気で筋を通すことでは、現代中国学の東京外語大教授中島嶺雄(◎)もひげをとらない。昭和四十三年、大学紛争のあらしの中で研究室をめっちゃにされた。貴重な資料も失った。紛争が解決して授業が再開されたとき、中島ひとり、学生が反省し謝罪するまで講義はできないと頑張った。「研究室を荒らしたのは過激派かもしれないが、一般学生も傍観していた。ほくは六〇年安保闘争のとき学生自治会にいたから、学生運動の退廃が許せなかった」

ば」だから、講義はお話でなく現実だった。「ほくは勉強好きじゃなかった。学者になるつもりはなかった」。学生出陣で、軍隊のあまりの非合理さを体験。復員して戻った東大で、尾高朝雄のカント「永久平和のために」の講義をきいて、学問とはこんなにすばらしいものかと思う。「小さな薄暗い教室で、寒さにふるえながら感動していた」

新人国記'81

長野県 ①

学者の里に咲く花

> 137 <



憲法擁護 小林 直樹

活躍した上田も近く、「猿飛佐助の師の戸沢白雲斎がいた鳥居峠もすぐそ

て分析する姿勢を変えず、学界の一匹狼(おおかみ)で生きてきた。最近、この十五年間の論を集めた『北京烈』を出版していたが、古い論文での見通しが間違っていたかという自信の表れでもある。

松本市生まれ。子どものころ才能教育の鈴木鎮一からバイオリンを習い、家には歌人の若山喜志子も出入りして、松本の文化的な空気を吸って育った。中国に興味を持った一因には、郷土の先輩竹内好の影響もある。これからの中国を「もう激動を繰り返すことはない。一つの時代は終わり、だんだんドラマ性がなくなる」とみる。

学者の里の巨大。民族学の国際的權威の岡正雄(△)、動物生態学の第一人者大飼哲夫(△)、臨海工業地帯という考え方を生み出して日本の高度成長の基礎造りをし、文化勲章を受章した土木工学の鈴木雅次(△)。いずれも松本市生まれ。鈴木は松本中学が日本に初めてスクイズプレーを導入した時の野球部員だ。地方史の一志茂樹(△)、日本史の児玉幸多(△)、所三男(△)、洞富雄(△)、北島正元(△)、金井田(△)、計量史の宝月圭吾(△)、農業史の古島敏雄(△)、宗教史の笠原一男(△)。歴史関係が並んだ。

学生に襲われたのは、当時華やかだった中国文化大革命を、その最初から権力闘争とみて分析していたのが、過激派の気にならなかったのかもしいない。中国べったりの学者が多かった中で、一貫して党内闘争、路線闘争とし

史関係が並んだ。(敬称略)